

観能のいざない

能 半部

立花

(はしとみ・りっか)

京の北山紫野、雲林院の僧が登場し、一夏安居(いちげあんご・一夏籠っての仏道修行)の終わりに花の供養をしていると、一人の女性が現れて白い花を供える。それは何という花かと僧が尋ねると、これは夕顔の花であると答える。そういうあなたはどのような方ですかと尋ねると、この花の陰から現れたのですから名乗らずともおわかりでしょう、五条あたりに住むものですとだけ言い残して花の陰に姿を消す。

僧が所の者に尋ねると、それはおそらく夕顔の上の霊であろうと言うので、五条あたりに行ってみると、夕顔茂る半部を押し上げて夕顔の上が現れ、源氏に見初められた時の様子を物語り、懐かしんで舞を舞う。やがて夜明けが近づくとまた半部の中に入り、そのまま夢と消えてしまった。

半部とは、建物の壁面に用いられた下から突き上げる形で開ける戸のことで、一枚では重過ぎるため上下二枚に分かれており、半部と呼ばれる。後半、夕顔の花と瓢箪で装飾された半部の作り物(能における舞台装置)が舞台上に出される。「立花」の小書き(特殊演出)では、立花供養の花が舞台上に出され、半部の作り物に藁が葺かれた屋根が付けられ、引き廻しと呼ばれる布がかけられ舞台に出される。

仕舞

難波

(なにわ)

時は春、梅が咲き誇る難波の浦に「難波津に咲くやこの花冬籠り 今は春べと咲くやこの花」と詠んだ王仁が現れ舞を舞う。

八島

(やしま)

八島の浦を訪れた僧の前に源義経の霊が現れ、八島・壇ノ浦での戦の様子を物語る。

山姥

キリ

(やまんば)

都の遊女・百万山姥が越中越後の国境・境川から上路越にかかると、そこに山に住む鬼女・山姥が現れ、山廻りするさまを見せる。

仕舞・・・能の一曲のうち見せ場となる一部分を装束ではなく、紋付袴姿で演じるもの。

狂言 長光 (ながみつ)

坂東方から都へ上る男が天津松本の市に着く。そこへすっぱ(スリ)が現れ、男が持っている太刀に目をつけ、盗もうとする。すっぱはすきを見て太刀の緒をほどき自分の脇に結びつけてしまう。二人は互いに自分の太刀であると主張し、それを所の目代が仲裁に入る。目代は刀の作られた国など順に尋ねるが、すっぱは男が答えるのを聞いて同じように答える。それに気づいた男がすっぱに聞こえないよう小さい声で答えると・・・

能 石橋 (しゃっきょう・れんじし)

連獅子

初めに牡丹の木が付いた台が出される。これが石橋を表す。

ワキの寂昭法師が登場し、中国、インドの仏教遺跡を巡っており、清涼山の石橋に着いたところであると言って座に着く。そこに一人の老人が現れたので、これが有名な石橋であるかと尋ねると、老人は、これこそ有名な石橋であり、その向こうは文殊菩薩が住む浄土と言われる清涼山であると答える。すると寂昭が渡ろうとするので、老人は、昔の高僧たちも、ここで難行苦行を積んで月日を送ったからこそ、この橋を渡ることができたのであるから、そんな簡単に渡ろうとするなどもってのほかであると諫める。さらに、この石橋は人間が渡したのではなく自然と現れたもので、幅は狭く苔が生えて滑りやすく、谷の深さに足がすくみ、相当に悟りをひらいた人でなければこの橋を渡ることはできないであろうと語り、影向(ようごう・神体などが姿を現すこと)の時ももうすぐであろうと言って姿を消す。すると文殊菩薩の足元を守る百獣の王・獅子が親子で現れ、百花の王・牡丹が花開く中、石橋の上で獅子の舞を見せる。

祝言としておめでたいとき、記念の会などで演じられることの多い演目。「連獅子」の小書きがつくと、舞台に出される台が通常二台のところ三台となり、牡丹も桃色に加えられ三本となる。獅子は紅白の頭(かしら・仮髪)をつけた親子の獅子が登場し、より華やかになる。前シテ(通常ツレであるが、連獅子のときは前シテ扱)は通常は童子(少年)であるが、今回は替えの演出で尉(老人)の姿で登場する。

(宝生流職分 佐野玄宜)